

あそ 6
2015



中野・氷川神社

燧ヶ岳



須賀忠男

呼称 ひうちがたけ

標高 2,356 m

寒禽を吸ひ込む影の燧岳
朝もやが流れ紅葉の燧ヶ岳
燧岳より雷の連打や山毛櫸林道
雁の鳴く夜がきて青し燧岳
生身魂語んじてゐる尾瀬の歌
残雪を踏み抜きまろぶ尾瀬ヶ原
郭公や木道濡るる尾瀬ヶ原
郭公を頂点として尾瀬ヶ原

長谷部公連
中里 永子
谷 けい
高瀬 哲夫
宇都宮敦子
篠田 純子
須賀 敏子
佐藤 喜孝

あそ

六月

初音 佐藤喜孝

東京

初音かな脳天直下足のうら

春深み間違ひ電話長引かす

春燈に濡れゐる石のうへの雨

青芝に小犬の脚の十四五本

春愁を水族館に見てきたる

深更のテレビでトマト試し切

爲残したこと

チンドン屋木登初戀富士登山



見る目はるけき 武蔵野の原
林開けて 家たちならび
道広まりて 車行き交う
驚くべきは 人の力
日に日におこり 日に日に伸び
学ぶ我等も かくてこそ

中野区立立谷戸小学校の校歌の一番。作詞は「故郷」「朧月夜」などの唱歌をつくった高野辰之。作曲は「海ゆかば」の信時潔。

この歌を六年間何かあると唄ったので覚えてしまった。これを口遊むと青空教室・二部授業・給食代りの干し葡萄など記憶力のないわたしにもいくつかの想ひ出が浮ぶ。二人の子供は同じ小学校。上の子の入学式は都合によりわたしが出席した。校歌が流れた。不意に身体の中の隠しボタンが押されてしまった。

猫

佐藤 恭子

東京

絶巔に星あつまりて春になる

日のひかりとりこみ水面春謳歌

春月の道をひとりで帰る猫

春の宵本に手をのせ絵空事

傾ぎたる下枝に花の色香かな

真夜の月猫の寝息が耳につく

簷滴の二本ひとつにさくら二分

☆

篠田

純子

東京

風ひかる少女の脚の直線美

桜東風佃煮の香と水音と

再就職の履歴書写真花粉症

クリームソーダつつきこぼして退職す

新年度の転送電話ぷっぷっブツツ

結婚行進曲ハミングしつつ受粉刷毛

母の字の我が名の茶箱更衣

先日暑い日、お向かいの家の玄関先にビニールの小さいプールが出ていた。まだ少し早くないかなと、買い物に行くので通り過ぎた。帰りに見ると水が満々と張ってあった。

その内そんなことも忘れてしまっていたら昼食の後片付けも終わりさあ仕事だ！。表の方でキャッキョッと嬉しそうなお子供の声が聞こえてきた。元氣な子供の声はいいものだ。そのうち誘ってもらってと母親の声が聞こえて、さつき以上に嬉しい声になっていた。水掛でもしているのが「いやあん、つめたいね」と言いながらも声は弾んでいた。お陰さまでパソコンの仕事の捗がいきました。

再就職してみたけれど、大変だ。今までも天地のひっくり返る事は、度々あったが、何時の間にか自分本位になっていた。自分が惑星になり、太陽の周りを回る体験は、久々だ。十九歳の時以来だ。新鮮だが問題は、体力だ。意地や負けん気は精神的なものだが、肉体が衰えている。そのうちに慣れるだろうと思っ

ている。老人力を信じて！
先ず風邪をひいた。次は腰痛だ。来る事は予測していた。想定範囲内だ。「こんな事してみたけれど、見返りはなんだろう？」と疑問。
自分で決めた事だから、地に足を着け、「不言実行」。

配達証明ってなに？ Excelってなに？ テップラってどうやるの？ 孫よ、若返った、ハテナ？ の日々は新鮮だ。

千社札

定梶じょう

石川

たくさんのランタン灯る花あしび

鉋刃嬌める折しも初音して

踏切の向かう側なる春西日

日が永しひとり酌む時さう思ふ

墓の数屯するかにうららけし

落花いま霏々たり世界終わるかも

知りし名の千社札ありあたたかく

四月尽

須賀敏子

埼玉

遅桜太平山に猪の道

参道をきれいに掃いて花まつり

翔馬くん二年生になったのね

試飲するビール工場春の雪

ゴロゴロと届く甘夏ママレード

闘病の友甲斐なくて四月尽

気が付けば空ばかり見て四月尽

〈獄につながれてあるやう極寒裡〉所屬誌の合評の頁にとり上げられ、「つながれてあるやう」か「あるやう」か評されたのだった。後年、丸谷才一さんが、人に「ある」を遣うのは誤りだ、と書いたことがあって、散文は旧かなを遣い文法に関するの著もある方が、とその物言いに驚いたのだった。

「昔男ありけり」のように、存在している、の意で「あり」を遣うのは現代語の「いる」がなかった昔として当然のこと。「昔々おぢいさんとおばあさんがありました」と遣っておかしいわけがない。現代語の「いる」は「ある」に派生するが、「ある」は「坐る」のことであり、「居ても立ってもいられない」はその対義語から成りたっているわけだ。

このところ、稲葉真弓の本を読んでいる。二〇一四年八月六十四歳で死去。「半島へ」は二〇一一年の書き下ろし。志摩半島での女一人猫との日々そして自然と共に生きる人々との関わりをすつきりと作品に仕上げている。そして最後の作品「少し湿った場所」は一九九一年から二〇一二年迄のエッセイ集である。

父・母・友人そして猫との暮し。真摯に生きて、作品を産み出す姿勢がよく分かる。「あとがき」は二〇一四年八月吉日となっている。

もう少し新しい作品と出会えないのはとても残念である。

春怒濤

竹内弘子

埼玉

烏貝井伏鱒二の酒祝

文豪の文鎮となる烏貝

葉桜や墓地の真下の山手線

葉桜やさらでも青き墓の径

青葉光おんあびらうんけん力石

葉桜や回覧板の滞り

葉桜や立ち暗みとも余震とも

あんこ飴

田中藤穂

東京

天皇は慰霊の旅に花隠し

春雪や小樽の店のおんこ飴

博物館の青銅の屋根木々芽吹く

春埃聖書に三島全集に

松花粉風に流れて海青し

花蘇枋お昼寝時間の保育園

白湯を飲む花冷の夜の湯ざめかな

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のおりしも私意をばなれよといふ事也。この習へといふ所をおのがまへにとりて終に習はざる也。習へと云は、物に入てその微の顯て情感る也。句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二ツになりて其情誠にいたらず、私意のなす作意也。唯師の心をわりなくさぐれば、そのいろ香我心の匂ひとなり移る也。詮義せざれば探るに又私意あり。せんぎ穿鑿せむるものは、しばらくも私意になるゝ道あり。たゞおこたらずせんぎ穿さくすべし。是を専用之事として名を地ごしらへと云、風友の中の名目とす。『三冊子』

一人暮しも十三年目に入った。さして淋しくもなく過ごしているのは俳句のお陰かも。何しろ毎月の句会に十句は考えなければならぬ。ぼけ防止には大いに役立っていると思う。句会で皆様に逢ってお話するのも何よりの楽しみです。それにこのご近所の人達がよくて生協まで買物に行っても途中何人も知合に逢って言葉を交す。角のMさんは櫛の芽の天ぷらを揚げたとか蛸焼を作ったとか家族の誰かが持つてきてくださる。墓参のお土産の桃の花、群馬の葱や大根、猫柳、根津神社の銀杏で炊いた御飯、昨日は違う知合が長崎の琵琶を二つくださった。何故か何時も私はよい人に囲まれている。子供達には今暫く元気の振りをして今の生活を続けたいと思う。

燕

長崎桂子

三重

ノクターンを聴く夕暮の霞かな

朧夜にハーモニカ聞ゆ童歌

花の昼飲物談議おもしろげ

菜の花の咲いていづこも笑聲

春の野花五色の庭簡易事務所

見慣れし野燕来たりて見紛ふ程

つばくらめいろとりどりの野は映えて

春の音

森

理

和

東京

駅構内飛来し始め燕

春の音ポツポツ聴へ雲ふはり

引きし跡寄す波被ふ春霞

黄水仙乱れ咲きをり留守の庭

山肌に白い筋あり春の雪

牡丹の芽屋根からラジオ家が建つ

突き出してぐんぐんぐんと菜種梅雨

私の地区の桜祭は三月二十八日から始まりました。近くの桜堤防の花見客は例年に比べて数多く、自宅の前を行き来する人が多くて、特に、よちよち歩きの子供が大はしゃぎして、道を右へ左への状態で、とても自転車での買い物の道すがらは危なくて、自転車を押して時々は足を止めながらの往き来となり不自由です。

知人もそれぞれに困る事柄のある人もいて、立話で少しばかり零すこともあります。

とにかく「マナーを守ってほしいね」と話して解散です。

とぶよとぶとぶ燕がとぶよ

青い空みて朝風切つて

忍ヶ岡の母校の窓を

かすめかすんで元気よく

笑顔がならぶあかるい学校

ごらんなさいよとささやきながら

台東区忍岡小学校の校歌です。

校庭を出て、不忍通りを横切ると不忍池です。体育の時間に走る時は池を一周しました。

東照宮までは坂道もありますが、少し急登な大きな石段を利用していました。今は噴水の広場になっていますが、日本杉原と私達が呼んでいた小高い広場は恰好の遊び場でした。

動物園、都美術館、国立博物館、等々続き上野駅。私の東京の故郷です。

☆

山莊慶子

埼玉

幼子を預りをりし春日かな

幼子の琴が奏でるチューリップ

遠雷に列の乱れし一年生

バス停に白鷺一羽立ちをりし

白鷺の餌を求めて遠出かな

ネモフィラの丘の向こうに青き海

愛餐のカレー大鍋薄暑かな

余韻

赤座典子

東京

図らずも盛りの藤の待ちてをり

雀の子確かむるごと部屋覗く

あどけなきひびきで呼ばる春の苑

うららかや挑み続ける滑り台

春夕焼ゆるゆる山を漆黒に

春の風邪旅の余韻と混沌と

春の地震カトマンズの友無事であり

ある日の午後、バス停に行くとき羽の白鷺が乗り場に立っていた。町の中で而もこれ程近くで見たのは初めてである。嘴と足が黒く他の部分は純白で非常に姿が良い。傍の溝に餌を見付けたのだろう。

数日後、水辺に行くと白鷺が飛んでいたがやはり一羽だった。きつと先日会った白鷺に違いないと思った。その日も雛のために餌を探しに来たのだろう。

久しぶりにヨーロッパの国々に二週間以上の船旅をし、無事に帰れたことにホッとしている。

イタリア ス페인 ポルトガル等、夫々の国の人々と我々日本人との違いは、やはり面白かった。

観光ガイドの説明もその地への郷土愛が伝わってきて、興味深いものがあった。

石造りの建物、縦横が倍もあるような体型の人々、大木となっているあらゆる花の中で過ぎて帰国してみるとローマのホテルの5階から1階まで覆っていた藤の花が我が家の藤棚にひっそりと揺れていた。

その他紫蘭 鈴蘭 鉄線等辺り一面にこじんまりと咲き誇っており、見るものすべてに感動している日々である。

春闌ける

秋川

泉
埼玉

先をゆく僧の衣に花ふぶく

亀鳴くや数独の穴あとひとつ

桜餅久闊の友とあらわれり

花の雨供養の膳に猫がのり

足早に過ぎゆく彼方花遍路

どこまでも続く細道春の闇

春光のみちみちてゆく疾走馬

☆

井上石動

山梨

笛の音もちとあらまほし熊谷草

畳々と寄せ来る高志の卯波かな

プラードの五番と五月盛りなり

母の日や母の三味線膝に置き

麦秋の真中を行くよお嫁さん

山椒のかくも甘き香くさを刈る

清水ひと湧き大多摩川へなだれけり

(五月号の続き) 『朝青龍』は、さすがに動じない。堂々と構えて怯まない。庭猫はじり貧だ。『朝青龍』は強い。長い戦いだつた。もう、こちらも庭猫も、ビクビク。睨み返す『朝青龍』が怖い。敵ながらあつぱれば、堂々の風格。しかし、その『朝青龍』がピタリと来なくなり、消えた。良かった!良かった!!と、一同喜んで、『朝青龍』とてノラ猫。少し経つと『朝青龍』どうしたかねえ」と、心配になり、今日に至っている。誠に、一匹狼的ノラ猫たちは、日々を生きることに懸命でいとおしい。さて、庭猫は、『ミヤ』という名で呼び相変わらず野生のまま、人間には懐かない。そして気付けば、九年の歳月が流れていた。『ミヤ』に異変が起つた!知つたのは、この三月に入つての事である。

当方の隣接三市の合同持ち回り大会「郡内俳句大会」の季節がやってきました。大月市・富士吉田市・都留市・上野原市・富士河口湖町等々の二〇七名一〇五〇句が集まり、只今各市代表計九名が選考中。今年に入賞句だけ大会冊子に載せることにしたので、いかなる「挑戦句・破格句」が出るか:と、愉しみにしていたのですが。

子供群: 嬰・児・幼・稚・子ら
居所: 空き家・厨・背戸 里類:
古里・山里・村里・故郷 状況: 一人居・職引きて 生活: 農 遺品:
父の鍬・母の針 齢: 七十路・八十路・土俵稀・喜寿・卒寿 山: 富士・八ヶ岳・甲斐駒が岳 動作: かすれた碑の文字をなぞる 登場仏: 野仏・馬頭尊・羅漢・地藏(そして、皆、笑まっています)。例年にも増しての、オールスターの頻出でした。

乗鞍高原

王

岩
愛知

あら楽し雪残りをる夏山路

屋根裏を飛び交ひ鳴くや親燕

青嵐雨後樹樹揺れて雫せり

山風に乗りて泳ぐや鯉幟

俯して見る高山の町夏きざす

白雲の棚引く夏嶺雨上がり

広重の夕立激し大橋に

春だから

大日向幸江

埼玉

お下りを嫌う年頃更衣

村雨の育ち盛りの筍に

波紋広げ恋かもしれず春の鯉

光り浴びくるくる回る矢車の

花吹雪歩み始めた子の笑顔

子育てに疲れた燕電線に

桃の花泣いて笑つて子の育つ

人間十句（古川柳）

のんびりといつもどつても親の家
寝てゐても團扇の動く親心
母親はもつたいないがだましよい
もちつとぢや子で辛抱をする女房
むりやりにこの事たのむのはそなた
女房に負けるものかと馬鹿が言ひ
こまつかいくせにあらいは人使ひ
使ふべき金に使はれ老いにけり
分別の四十に遠き三十九
神佛に手前勝手を申し上げ

正岡正篤著「百朝集」

今日久しぶりに机に向つた、使い
馴れたボールペンのインキが無いら
しく、弱々しい字となつてきた。

自転車で十五分の「なんでも屋」
さんに行く、ゼブラペン0.5mmの
ペンが私には使い心地が良く大人買
いで五本買った。後4〜5年は大丈
夫だ。文具売り場は子供達の好きそ
うなキャラ物が一杯、私の子育ての最
中はキャラ物なんか目にもしなかつ
た。トンボ、コーリン、コクヨ今で
は目にしなくなったメーカー名だ。
コクヨはノートで、トンボは鉛筆で
残っている「失礼」。今度文具売り
場に来るのは何時かなさあ、頑張ら
う。

☆

齊藤裕子

東京

自転車で素つ飛び巡るさくらさくら

遺しゆく者に幸あれ花吹雪

闘つて散れば本望花吹雪

夕焼けの雲見る心地更紗木瓜

枝埋もるまで撓わに咲けり更紗木瓜

草萌えて川岸の土手光り出す

せつかちとのろまの二人春の雲

はなてふはなの かがみなる
さくらのくもに つつまれて
きよきあかるき うましさと
ここぞわれらが 生福校

???

薩摩隼人の ちをうけて

立てし祖先の いさおしや

ここぞわれらが 生福校

小学校の校歌は入学式、卒業式、始業式、終業式、運動会、行事の度に六年間歌わされたが、昔風の歌詞で意味もよく分からないで歌っていた。大正生まれの父母も同じ校歌だったと聞いていたので、九〇歳になる母に先日電話できてみて、一番の歌詞をちゃんと覚えていて、明るい声で歌ってくれたのには吃驚した。私の記憶は、一番の歌詞が途中から二番に飛んでしまっていた。父母の時代には生福校（せいふくこう）を吉村校（よしむらこう）と歌っていたらしい。私が中一の時小学校は改築されて、三学年下の弟達は校歌も新しい校歌になった。今度実家に帰ったら、懐かしい校歌の二番三番の歌詞を尋ね歩いて、調べてみたい。

五月作品より

齊藤裕子・佐藤喜孝

移りつつ藪うぐいすの出てきさう

佐藤喜孝

春陰の下駄箱に下駄ひとつあり

佐藤喜孝

南武線沿いの久地に我家の墓はあるが、新緑の頃からのお墓参りは、鶯の鳴き声が聞こえて楽しくなる。鶯が鳴いた後で、その声を真似て口笛を吹くと、また答える様に鳴いてくれる。鶯と鳴き声の競演が始まる。

野山に出掛けた作者に、遠くで鳴いていたと思った鶯の声がだんだん近づいてきたのでしよう。一羽が鳴いている訳ではないのですが、まるで同じ一羽の鶯が作者を意識して、だんだん近づいて来て鳴いているように思える。そしてひよこり姿を現しそう。野山で鶯の鳴き声に出会えると、本当にそんな気がして楽しくなると思いました。（裕子）

作者は、下駄箱に下駄がひとつあったとだけ言っている。では他は全部靴だったのだろうか？いや、そうではない。下駄がひとつあるだけで、ほかは皆空っぽなのだ。そう思いました。春陰という季語のなせる力でしょうか。下駄は女物。何か事情があって女の人がひとり残っている。一昔前の映画の一コマのような情景が浮かび、想像が広がる句でした。（裕子）

夢の怒り鎮まりてゆく石路の花

齊藤裕子

「夢」といふ言葉には、あこがれ・希望などといふ意味も含まれてゐる。しかしバラ色な夢だけが夢ではない。わたしも死刑囚になった夢を見た

ことがある。目が覚めてもそれが夢と分つてもしばらく夢の中から抜け出せない。寝汗を掻いてゐるときもある。裕子さんの見た夢も愉しい夢ではない。怒り心頭に発する出来事の夢のやうだ。時が経てば夢のこと、心も鎮まつてゆく。が怒るほどの忘れがたい夢であつたのだらう。石路の元氣な黄色の花にほつと一息。(喜孝)

春近しと言ふに大木横向きじゃ

佐藤 恭子

物の向きは、見る者の立ち位置で変化していく。作者が正面から見たその大木は、その時まるで横を向いている様に見えた。というより、作者はそう感じてしまった。苗木を植える時は、正面から見て格好良く見える様に植える。それが横向きになつてしまつたというのは、苗木ならありそうな事だ。しかし、この句の木は大木なのだ。作者はこの大木を、まるで大人の人間

が拗ねてふいと横を向いているように捉えている。寒い冬ももう終わりに近づき皆喜んでいっているのに、お前は大きな成りして横を向いて拗ねているとはどういう事だ？と語りかけているやうで、面白いと思ひました。(裕子)

冬夕焼波折の色のとめどなく

佐藤 恭子

「波折 なをり 古語。波のをり重なりて高く立つこと。また、そのところ(古事記傳)。一説、波の折り返すこと。また、その所」と大辭典(平凡社)にある。さういふ波と冬の夕焼が織りなす動きと色彩の多様さが想像できて余韻嫋々として尽きない。波間・波頭などと比べると波折の佳さを実感した。(喜孝)

鶯や第七サティアン跡更地

篠田 純子

富士吉田に住む息子が先日帰つて来て、「こ

の前、上九一色村を車で通つたら凄く良い所だつた。帰つてから、その日のうちにもう一度自転車で行つてみたよ。暗くなりそうで時間もなくて、どこにオウムのサティアンが在つたのか分からなかつたけど、あんな良い所なら、真理を求めてなんて気分にもなるかも。」と言つていた。スマホには、富士山を背景に広々と美しい緑あふれる景色が写つていた。

作者が見たサティアン跡地も今は更地になり、野山に鶯の声が響き、あの忌まわしい事件があつたとは思えない、美しい緑の平和な村に戻つているのでしよう。しかし、人々の記憶から消え去る事のない事件の跡地だけに、平和な鶯の声の清らかさが一層心に響いてくるやうです。「鶯や」は作者の平和への祈りと願いがこもつていと思ひました。(裕子)

海丸く銚子一面春キャベツ

須賀 敏子

絵画を描くやうに書かれてゐる。かの「秋の航一大紺円盤の中 草田男」と比べると、大らかで木訥な表現に癒される。明るいキャベツ島の向ふの耀く海。弧を描く水平線、なにもかも春光のもとでの光景である。(喜孝)

母の論しいまこまやかに柿芽吹く

竹内 弘子

子供の頃、あるいは大人になつてからでも、親に言い聞かされた言葉があると思う。そして、同じ場面に遭遇した時、また親を思い出す時に甦つてくる。人によっては、その親の論しの言葉をいつも心に刻んで、自分の指針としているかもしれない。

作者に、今はなき母親の論しの言葉が、自分がその時の母親と同じ位の年齢になつたり、

ひよつとしたら、その年齢を越してしまった今、その時と共に甦り心に響いてきた。「いまこまやかに」に母親の気持ちは今十分に理解している作者がみえる。「柿芽吹く」の下五は、論し今ありがたく思い出している作者の母への思い、双方の優しさが溢れているようで心地よい。芽吹いてくる柿の芽は、子供の頃の作者をも表していると思いました。(裕子)

会釈してマスクの人の眼が笑ふ

田中藤穂

最近風邪予防、花粉症対策にとマスクの人を多く見かける。マスクをかけている側から見れば相手が誰だかよく分かるので、会釈して微笑みかける。しかし、マスクをしている人を見ている方は、眼だけ出している人が誰だか咄嗟には分からない。きつと藤穂さんも、会釈を返し

て微笑んだと思う。でも、「はて？どなただったかしら？」誰でも経験ある光景を上手に捉えて表していると思いました。出会いの後の、お二人の会話も想像して楽しい句でした。(裕子)

咲きみちて杏もの憂き夕曇

田中藤穂

詩人は表から裏を読取る。現から次を見る。満開の杏の花に会えば素晴らしいとまづは思ふ。しかしそこになぜか物憂さを覚えた作者である。俗謡に「日暮れになると涙が出るのよ」とあるが、かすかなうれひをが湧く。そんな藤穂さんの心も知らず色を濃くした杏の花は夕色の中に咲きほこつてゐる。「もの憂き」と云つたが為にさらに杏の花はあでやかになったやうだ。(喜孝)

茹で上がり鉢にちんまり菠薐草

長崎桂子

「土まどふ露地物うれし菠薐草」に続く句。

作者はご自分で育てた露地物の菠薐草を収穫し、茹でて召し上がることにした。青々と茹で上がった菠薐草を水にさらし、軽く絞って鉢に盛る。「ちんまりと」で茹でて高の減った菠薐草の可愛らしい様子が目に浮かび、作者の育てた菠薐草に対する愛しい思いが伝わってきて、微笑ましい句だと思いました。(裕子)

折離の一對並び留守の家

山莊慶子

この句はおもしろい構造になってゐる。家人の居ない部屋の中の様子を詠んでゐる。留守にしたあとの部屋の様子を描いてゐるのです。「見てゐないもの」でも「見えないもの」でも詠むことをする。「折鶴」「一對」にも注目したい。思ひのこもった言葉である。(喜孝)

土の中に根をはり大きくなった樹が、土の中心でなく地表にも顔を出して四方に伸びている。その様子を春の土の側から捉えて「根っこを載せてる」と表した。まるで大きな地球の表面に根っこが這い出しているやうな大きな景を感じる。「ごろごろ」と立派な根っこの感じが良くでていて、力強い情景ながら、「春の土」で植物を育む温かい土の優しさが伝わってくると感じました。(裕子)

簡素化された情景により春の土が生き生きと在る。「ごろごろ」といふから複数の根っこが掘り起されて転がってゐる。「根っこ」といふから草ではなく樹の根っこである。「載せてる」は春の土が根っこを載せてゐる、とも読めるし、トラックの荷台かも知れぬ。わたしは前者の一元描写と受止めた。(喜孝)

ごろごろと根っこ載せてる春の土

赤座典子

移りつつ藪うぐひすの出てきさう	佐藤喜孝
夢の怒り鎮まりてゆく石路の花	斉藤裕子
冬夕焼波折の色のとめどなく	佐藤恭子
霾ぐもりランナーズハイと擦れちがふ	篠田純子
火事鎮火折から春の月上がり	定梶じょう
海丸く銚子一面春キャベツ	須賀敏子
震度3ほどを春愁とや言はん	竹内弘子
咲きみちて杏もの憂き夕曇	田中藤穂
茹で上り鉢にちんまり蒔蓑草	長崎桂子



野良猫の二匹連れ立ち水温む	森理和
折雛の一对並び留守の家	山荘慶子
ごろごろと根っこ載せてる春の土	赤座典子
母を待ち春の筍掘り出して	秋川泉
口開けて黙の埴輪や春の昼	井上石動
見下ろして木曾川光る春日影	王岩
長生きの呪文のやうに野遊びす	山荘慶子
ほふりゆう寺かはらぬものに秋の風	佐藤喜孝



まいま

こだま 四月号

冷雨打つ落花一面血のしづき 松林 尚志

ホトトギス 五月号

新能開新しく塗り替はる 稲畑 廣太郎

蚕豆の皮無き如く供さるる 稲畑 汀子

馬酔木 五月号

手拭を固く絞りて木の芽どき 徳田 千鶴子

おむすびの丸や三角野に遊ぶ 水原 春郎

風土 五月号

葱買つてこれや五分の渡し船 神蔵 器

春燈 五月号

おもふさまふりてあがりし祭かな 久保田 万太郎

雁ゆくや千樫が里の入相に 安立 公彦

末黒野 五月号

ゆつくりと軒樋伝ひ春の雨 小川 玉泉

家ごとに小さき橋掛け梅の里 松本 三千夫

峰 五月号

補植後の足に植田の泥匂ふ 布川 直幸

知らぬ間と云はせてならぬ霜の花 鴨下 昭

空 五月号

相愛と思へぬ雛を飾りけり 柴田 佐知子

六花 五月号

花散るや死んでも逢へる保障なく 山田 六甲

妻の顔雛の鏡にうつりけり 佐津のぼる

雨月 五月号

忌に添ひて庭の白梅開き初む 大橋 暁

集 四月号

教会の開かぬ高窓鳥渡る 大山 夏子

朝 五月号

曇天のまん中たるむ独活の花 岡本 眸

何か遠し葭簀のかげに物食めば 々

引鴨を見つめつづけて啼かしけり 長沼 三津夫

雲の峰 六月号

薫風に酒置く近江泊りかな 朝妻 力

萱 六月号

あしおとは地を踏むおぼろ月夜かな 木村 嘉男

花の酒灘も越後もなかりけり 亀田 虎童子

鳥引くや浄水場に音の無く 小島 良子

船団 一〇四号

塵取るや又つながらりし蟻のみち 阿波野 青畝

かげぼふしこもりあるなりうすら 々

げじげじのいのちちりちばらばらに 々

向こう三軒老人がみて桃の花 々

杖ついて来てぶらんこを漕いでゐる 柴田 志津子

沖 五月号

走り根に日の斑が揺らぐ愛鳥日 能村 研三

雨でなく雪でなくひとひらの水 辻 美奈子

もよもやが集まり春の山になる 安居 正浩

マヨネーズばふんと終る春の昼 林 昭太郎

鳴 五月号

地境の塀貧しくて木瓜ま白 井上 信子

梟の足踏み替ふるばかりなり 相良 牧人

槐 五月号

指先に残る記・憶や牡丹の芽 高橋 将夫

ビッグバン千億年のかひやぐら 柳川 晋

万象 五月号

如月や昼の満月見る鴉 大坪 景章

やぶれ傘 四月号

雪晴れの道を歩いてゆく鴉 大崎 紀夫

ろんど 五月号

眼を細めしことが返事のマスクかなすずき 巴里

京鹿子 五月号

葦角組むとほくに伊吹置く湖は 豊田 都峰

金玉羹

信号をなだれて渡る神輿かな 宇都宮 敦子

ぽつぺんを吹いて淋しき顔になる

蟬の羽化夜警の人と見てをりぬ

笑ひ声どこかに奈良の昼寝時

掃苔や放蕩者と聞き及ぶ

花つきの瓜の馬にて来給へり

子子や日のあるうちに夕餉終ふ

敬老日わたしに髭のやうのもの

寒山の連れのやうなる破芭蕉



俳境流連

敗戦日猫が手の甲舐める舐める じょう

(二〇〇六年十月)

五〇歳も半ばを過ぎて大阪に住んで。そしてある結社誌に所属した時のことでした。

「敗戦日」をよみ込んだ句を投稿。「お若い方が敗戦の日の句を詠むこと珍しい」というような評がなされていたのでした。数ヶ月後、今朝もあける押入十二月八日」を投句。その評言に「十二月八日をご存知かと思いがらいただいた」とあつて呆然としたのでした。

むかしと違い、近年の投句用紙には年齢を書く欄がありませんし、主宰と顔を会わせたことがない。句が幼いと思われたか、とも思ったのですが、添削されることがなかったわけですからそうとも思われ

ない。あと考えられるのは。そうなのでした。禿筆

のせい、と。中学校時代の同窓会。受け付け係のひとりに任せられて、参加者の名前を記録する役をおおせつかったことがありました。一人が私の手もとを覗きこんで、「おつ、ちつとも昔とかわらん字を書くのオ」と言ったのでした。要するに進歩がない、幼い字である、と。関西でいう「ほつとけ」とはこんな時に遣う台詞なのですが、重々自覚している私には返すことがなかったのです。

さてその結社誌。そのあとすぐに退会したのですが、その時の後記に「まだお逢いしたことがないままやめられることになったが、多分二〇歳代の方ではないか、と」なぞとあるのです。真実「ほつとけ」と思ったのでした。

トマト食む初恋の味とほきかな 桂子

(二〇〇七年八月)

トマトの苗を買って来て、やっと実がなり一番最初のを口にした時「ああ美味しくない酸っぱい」と独り言が出ました。

そうしてどうしたのか十代の頃、お友達とハイキングに行った時林檎の話になり「やさしい甘さでちよっぴり酸っぱい、それは、初恋の味よ」なんて誰かが言い出し、その後は、経験した事もない話を皆が口口にわいわい話して大騒ぎで、笑いこける人も居り真下。何故か十代の頃の事を思い出したのでした。

草引けば虫の浮世が在りにけり 裕子
草引くは想定外と虫喰ふ

(二〇一一年七月)

主人の父が亡くなった後、庭の植木や花の世話は、もっぱら私の役目になった。世話を始めると、今まで義務的に手伝っていた水遣りや草引きも楽しくなり、花の植え替えや、剪定も一生懸命やるようになって。雑草が次々生えてくるので、草引きも怠れない、

草を引くと色んな虫が出て来る。蟻、蚯蚓、ダンゴムシ、何だか分からない虫の幼虫等々。小さな虫の卵がいつぱいあつたりする。

人間は勝手なもので、都合の悪い虫を疑いもせず、平気で殺傷してしまう。私も害虫らしきものには殺虫剤をかけるし、蟻だつて時には踏みつぶしたりしてきた。しかし、草を引きながらそんな虫達を眺めて観察したりすると、何だか虫の気持ちになって、虫の一生や、家族に思いが及ぶ時がある。ここまで繋がれて来た命、人間と同じ様にこれらの虫達にも恋もあり、家族もあつて、出会いや別れもあつただろう。草引きで住処を追われた虫達の「それはないよおー、想定外だよおー。」と叫ぶ声が聞こえるような気がするのだ。

ただ躓いてゆくだけでもある蟻の列 じょう
曲がらねばならず曲つて蟻の列

(二〇〇九年九月)

数年前に『働かないアリに意義がある』という書
が出版されて、随分売れたようです。私も読みまし
た。但し古書店で購入して、いわゆるベスト・セラー
かそれに近い本ほど古書店に現れることが早いよう
で、奥付によると出版一年足らずで古書店の棚に置
かれたのでした。読み手にとっては有難いのですが、
著者には腹立たしいことでしょう。おおよそ、ベス
ト・セラーがロング・セラーになりやがて古典とし
てあつかわれる。それが著作物の理想なのでしょう
が、そんなものは何十年に一冊あるかどうか。もし
て此の『働かないアリに意義がある』は、もしかし
たら「ロング・セラー」になるかもしれない。
ファーブル以来昆虫に係る本は沢山あって、それぞ
れ面白いのですが、この本のように、「働きアリの
2割ほどはずっと働かない」ことを発見して報告す
る、そのために「二ヶ月以上の観察を、疲労のため
点滴を打ちながら」続けた、とありますから、大実
験だったのです。

ないアリが存在。そしてそういう働かないアリは実
は怠けものではなく、「働く」という感覚に鈍
いために幼虫が餌を欲しても行動を起こすこと遅
く、敏感な他のアリが先に行動を起こすために怠け
ているようにみえる、と。そして幼虫たちが一齐に
餌を求めて手が足りなくなつて初めて働き始める。
即ち「効率的に仕事を処理するための本能」という
ことなのです。無駄は結局淘汰されて、「自然に無
駄はない」といわれます。
人は随分無駄をしますが、まだ伸びしろがあつてこ
れから無駄が淘汰される存在、と思いたいものです。

車椅子ぼつんとはなる鴨群るる 恭子

(二〇一〇年十二月)

もうそろそろ北へ帰ってしまう鴨、公園に行った
時に鴨の群れに出会った。ベンチに腰掛けて鴨の動
きに見入っていたというか、ぼんやりと見ていたよ

考えてみて下さい。一つの巣の中に何匹いるか知
りませんが何うやつて一匹一匹を識別したのか。そ
れについては書中に具体的な説明がないのが残念で
すけれど、少なくとも複数の巣の「働かないアリ」
だけを集めてきて、あるいは「よく働くアリ」だけ
を集めてきて、一部の個体は良く働き、一部は殆
ど働かない、という、もとの群れと同じ形態になる
んだそうです。その理由として、「かなり単純な判
断しかできないハチやアリ達のコロニーが効率よく
仕事を処理していくために、必要な個体数を必要な
場所に配置するメカニズムが必要」。

人間の会社ではこれは上司の仕事だが、彼らの社会
には上司はいないので、別のやり方が必要になる。」
これが働くアリとそうでないアリが出現する理由
だ、というのです。

少し説明してみます。

巣の中では日常的に女王や卵、幼虫を世話する働
きアリがいるわけですが、その手が余る時には働か

うだ。何をしているのかは鴨でないので良くわから
ないが、頭の中を空っぽにして見ているとそれぞれの
動きが面白い。

歩き出したばかりの赤ちゃんもいろいろの動きがあ
つてとても面白いというか楽しい。損得、勝負け
が眼中にないということは真つ白な心で見えられ
るし何の邪心もない子のさけび動きは素直にこころ
に響く。親子の楽しい笑い声が響く公園の片隅に
一人で動かす車椅子に若い女の子が鴨を眺めていた。

独り居の集ひて笑顔木の芽和 桂子

(二〇一一年六月)

私の住まいの地区では春と秋に独り世帯の方に地
区のセンターで、お昼を提供して下さる会を福祉課
が中心で催されます。

初めて参加した時は三十余名ほどいらっしやいま
した。それに朝から此の昼食を作つて下さる方々が
多数いらっしやって、皆様と一緒にお昼を頂戴しま

す。そしてこの集まりに四日市北警察の方が、今の社会の犯罪状況からの、毎日の生活に注意する点を幾つか教えて下さいます。市役所からは健康についての注意を二・三お聞きしました。

お料理は季節の具材たっぷりちらし寿司に、和え物の木の芽のいい香りがし、その味もとても塩梅良く出来ていて、私の回りは食事中もっぱら木の芽の話題で盛り上がり、賑やか過ぎて、笑い声での騒々しい食卓を囲み、ご迷惑をお掛けした様で反省しています。

終わりの冷たく甘いデザートも頂戴し、皆さん満足した満面の笑顔で会場を後にしました。

三月は無かったことに四月馬鹿 純子

(二〇一一年六月)

四月から、週五日、九時から五時迄の仕事をする
と覚悟を決め、三月は有休をたっぷり取り、好きな
事をした。地域での活動発表、孫に会ったり、吟行、

句会、買物、食べる、呑む……。三月三十一日には
退職のセレモニー。勤続に対する感謝状と、わずかな
金券やら花束をいただいた。

そして四月一日同じ場所で、新課長から、任命書
をいただいた。そしてこの歳で、こんなに？と、思
う位働いている。働いている。スカートは捲つてい
ないが「天国と地獄」の音楽に合わせ上下左右に動
き回る。チャップリンの「モダンタイムス」の流れ
作業めく時もある。はたまた人間関係が「おしん」
だったりもする。ああ、三月が懐かしい。この現実
の四月が嘘であって欲しい。

昼になにを食べようかとか、早く寝ようとか、欲
望も小さい。せめて木曜日にロト7を買いたい。当
たれば四月が無かったことになるのだが……。

藤棚に見知らぬ人と雨宿

幸江
(二〇一二年七月)

私の家の近くに藤で有名な霊園がある。その日夕
方近く藤の花を見に行きたくなった。スニーカーを
履き、ふらりと家を出た。歩いて15分で着く。黄昏
の中藤の花は三分咲きだ。いきなり夕立のような雨
粒が落ちてきた。私はもちろん大きな藤棚に飛び込
んだ。雨と一緒に稲妻が走る、これならすぐに雨も
上がるだろう。

そんな時、棚の中に人が、一目見て二人は夫婦だ。
会話をすることもなく私とご夫婦は空をみるばかり、
やがて大きな雨粒が小粒になり雲の間から残さ
れた茜空が見えた。私は思わず御二人に、「空を見て、
すてきな茜雲よ」言ってしまった。二人はゆっくり
と頭を下げた。「お先に」私は藤棚を出た。

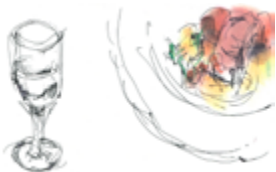


あをキーワード俳句辞典(こーこい)

弧

夕風に弧を描きたるかへりみち 赤座 典子
 登山靴八方へ散る飛蝗の弧 森 理和
 大き虹視界のすべて弧の中に 早崎 泰江
 弧を描く何の道帰る燕かな 佐藤 恭子
 弧をかいて氷上のテント並びをり 吉成美代子
 小上がり
 囀や小上がりに充つ食べざかり 赤座 典子
 小鱈
 青柚子の香を添へたるや灘小鱈 関口 ゆき
 みづいろに小鱈のかわく春の風 竹内 弘子
 小鱈刺 小鱈刺子供は海に坐りこむ 佐藤 喜孝
 コアラ
 ねむいコアラにカンガルー跳ねて春 堀内 一郎
 恋
 バレンタインデー十八の恋終りけり 後藤 志づ

春の泥のつぴきならぬ戀らしき 篠田 純子
 恋失せし昼の螢のなまぐさし 関口 ゆき
 恋少年踊の外に夜空見る 竹内 弘子
 式部の実一葉の恋ままならぬ 鈴木多枝子
 たけくらべのやうな恋あり星祭 田中 藤穂
 白木槿一度の恋をそのままに 堀内 一郎
 白梅や引いてみやうか戀みくじ 芝 尚子
 恋知らぬ乙女に榎植歪つなり 定梶しよう
 みずずかる信濃は夏と恋文に 芝宮須磨子
 恋人を抱へるやうに笙ぬくめ 東 亜 未
 春の宵切切と沁む恋の唄 森 理和
 走り梅雨サツクス奏者に恋をする 齊藤 裕子
 ラジオから仏蘭西恋歌さくらんぼ 井上 石動
 小説の中に恋して春燈 須賀 敏子
 初恋や蕊の色香の白薔薇 佐藤 恭子
 鯉
 春光の波紋自在に銀の鯉 松本 米子
 散る花や掘割の鯉見え隠れ 須賀 敏子
 春雷の遠きひびきや鯉沈む 鎌倉喜久恵



地中海・カナリア
 諸島クルーズ紀行

赤座吉保

妻の母を送ってほぼ一年、二歳になる孫が関心事の中核となりつつある生活に変化を求め、アラスカ以来十年ぶりとなるクルーズ旅に出ることにした。
 行く先は表題の地域とし、半年ほど以前よりPCネットワークを駆使して計画を練り、四月四日に出立した。

クルーズ船の出港地は、中世イタリアで海運王国としての権勢を誇ったジェノヴァである。街は現在でもイタリア最大の港湾都市であり、街の中心地にある中世の邸宅群が世界遺産となっている。

因みに二〇一四年現在の世界遺産総件数は一〇〇七件で、内イタリアは五〇件でトップ、日本は十八件で十三位である。

邸宅群にそれほど際立ったものはないが、全体でイタリアの象徴でもある石の文化を表出し、中世の香りを放っていた。

中世の春の靴音大理石

ジェノヴァから列車で二時間ほど南にあるチンクエ・テッレ（五つの漁村）を訪ね一泊の小旅行をした。

三陸鉄道開通以前の陸の孤島といわれた地域と同様に、船しか交通手段のない時代からの固有の文化と、絶海に建つ家並を守っている漁村が、世界遺産に登録されている。

特急列車で目的地の三十分ほど先まで行き、ローカル列車で戻る旅程であったが、その列車に乗車できない人が出るほどの混み合いに遭遇してしまった。

何とこの日が、クリスマスと並ぶキリスト教徒の重要な休日である、復活祭であった。道も広場もレストランも人で溢れていたが、チンクエ・テッレは海上の船から見るのが一番であり、これは十分に堪能できた。

復活祭チンクエ・テッレ人の波

ジェノヴァに戻り四月八日に乗船し、十一泊のクルーズがスタートした。

全長三三〇米、十三万トンを超える大型船であり、臨海地域に建つ大型高層マンションが、数棟連なつたようなイメージである。揺れることもなく、騒音もなく、カラフルな街並みを抜け、紺碧の空と、藍色の海への船旅が始まった。

藍深く春潮の満つ地中海

クルーズ船には寄港地ごとに、多様な観光プログラム（エクスカーション）が用意されている。

最初の寄港地はスペインのバルセロナである。オリンピック開催・サッカー・闘牛・フラメンコと多くの対象があるが、未だ建築途上にあるサグラダ・ファミリア教会見学を中心とした市内観光コースを選択した。

歴史ある街にも関わらず、未完の教会の他にも、日本の著名建築家を含む世界の設計家による、斬新なデザインの建物構築が進められている。さすがアート感覚を大切にす国と感心した。

いつ間かん未完サグラダ卒業歌

航海三日目の深夜にジブラルタル海峡を抜けて大西洋に入る。翌朝、北アフリカの国、モロッコのカサブランカに到着する。

ここでもサハラ砂漠・メディナ・スーク・カスバ・革製品・アルガンオイルと関心キーワードにこと欠かないが、首都ラバト見学を含む一日コースに参加し、ベルベル人文化の一端を垣間見た。

亀啼くや五万足の大モスク

毎日、夕食時以降に着用する服装について、カジユアル・インフォーマル・フォーマルとド

レスコードが決められる。三日目の晩が最初のフォーマルデー。船内ではガラ（祝祭の）ナイトと言い、それぞれに着飾り一時を楽しむ。

日本人のフォーマルといえば和服に勝るものなし。今回は二人とも着物を持ち込み、日本文化の喧伝に努める結果となった。

最先端にある我らの部屋から、船尾のレストランまでの三百米、多くの視線や、笑顔や、掛け声を受け、両の手をはるかに超える数の外国の方々より「キモノ！一緒に写真を！」と請われた。

夜半の春世界語となる着物かな

大西洋アフリカ大陸沖にあり、スペイン領である七つの島がカナリア諸島。「大西洋のハワイ」「常夏の楽園」とも呼ばれている。最大の島がテネリフェ島。東京都ほどの広さながら、富士山を越える高さの活火山ティディ山が、島の中央に聳え立っている。

この山が、大西洋を渡る貿易風を止めて雲海を生み、景観と気象を一変させる。「十三の気候帯を持つ島」とも呼ばれている、多彩に変化する様に触れることが出来た。

貿易風止めて雲海滝となり

航海七日目、大西洋最後の寄港地フンシャルに入港した。ここはリスボンの西南千キロ米にあるポルトガル領マデイラ島。

オレンジ色の屋根と白壁に統一された家並、紺碧色の大西洋とのコントラストが「大西洋の真珠」とも表現される所以の地である。カナリア諸島も含め大航海時代の歴史と足跡が残る地域でもある。

風眩し海路に残るコロンプス

クルーズには終日航海の日が組み込まれている。乗船客を飽きさせないように、様々なアトラクションや催しが行われる。

これも世界語となったカラオケ大会が毎日のように開かれ、船内ニュースで「皆が聞いたことのないヒットソングを歌ってみて！」の誘いに会場に行ってみたが、イタリア語と英語で表記された曲目集を見て諦めた。

また、ドレスコードの中に「イタリアデー」のような、テーマデーが組み込まれている日もある。こんな時は、白・赤・緑色のパンツやシャツやらの組み合わせで楽しんだりもした。

イタリアンチーズのデザート春燈下

大西洋から再び地中海に戻ったのは航海九日目。スペインのマラガに寄港した。ここはパbro・ピカソの生地。エクスカーションは「ミハス観光コース」を選択。マラガから一時間ほど内陸に入ったところであり、街全体を真っ白に統一し、アンダルシア地方の特徴を体現している。

スペインで最も優れた陶器、といわれている

サルガデロス陶器の、取手付きスーパークップを手に入れることができた。 独創的なデザインと色使いで、「ピカソを含む多くのアーティストに影響を与えた」との能書きに納得して。

ピカソの地ブルーとピンク麗けし

最後の寄港地は、ローマ観光の起点となる、イタリアのチヴィタヴェッキア港。

ローマは世界有数の観光地でありながら、「バッグ類は常に体の前に」のようなスリ対策、切符販売機つり銭横取り対策、タクシー料金トラブル対策などが、どのガイドブックにも記載されている。

そこで、旅の最後を飾る観光の安全対策として、ローマ在住日本人観光ガイドを、日本出発前に契約していた。

コロッセオの前で落ち合い、現地人だから知りえる情報にもとづいた、プライベートガイドにより、安全対策を一切忘れることのできた

充実した時間となった。

陽炎や古代ローマの轍あり

翌日、ジェノヴァで下船し、ローマ経由の航空機で無事帰国した。

旅先でWi-Fi利用によるインタネット接続を目的に、ガラ携をスマホに交換していた。当初目的の達成は程々であったが、動画撮影機能が素晴らしく、記録が静止画+動画となり、未だその整理が完了していない。

同時に、俳句のことを考えながらの海外旅行も初経験となった。

作句にあたり「地名を入れると旅情に溺れがち」と喜孝さんから事前にアドバイスを受けていた。本文掲句にどれだけ反映されたか不明だが、努力してみた積りである。

ローマで見東京で見る藤の花

再 発

齊藤裕子

再発告ぐ主治医の眼暑き日よ

日雷転移再発想定内

さくら貝遺言のやう句を作る

大股で二歩ずつ歩め蝸牛

鳳仙花美人薄命と笑うてやる



まあだまだと神追つ払ひ鰻喰ふ
詫びるよに告げる再発額の花

再発を母にも告げる額の花

言の葉に力を貰ひ夏迎ふ

言ひたき事猫に言ふ夫籐の椅子

心太あきらめないが合言葉

毎月25日発売
定価1200円(税込)

月刊俳句界

2015年7月号

【大特集】
実力俳人が俳句の基本をやさしく解説！
みるみる上達する
俳句入門

●執筆陣
榎本好宏
鈴木太郎
原朝子
山崎聡
山崎十生
奥坂まや
小林貴子
寺島ただし
朝吹英和
長嶺千晶
他

○季語とはなにか
○字余り字足らずはど
こまで許されるのか
○三段切れはNG?
○見えないものを詠む
のも写生?
○二句一章とはなにか
○ふりがなの使い方
○前書きと補注の使い
方
○初めての吟行の心得
他

クラビエ 俳句界NOW 藤木俱子

21句 大塚あきら 伊藤完吾 柴田佐知子
●お邪魔します 書斎訪問 八染藍子「廻廊」
●私の一冊 飯野幸雄「夕風」
●魅惑の俳人 館山實
佐高信の甘口でコンニチハ！
小林節（兼法学者）

別冊 投稿俳句界 一流選者29名！
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。

株式会社 文學の森 森
お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

齊藤裕子さんの病気の再発には驚愕した。すぐ特別
作品を送稿して来られた。意志の強さに感服した。裕
子さんの随筆でご家族の歌好きを知った。納涼にかこ
つけカラオケにでもお誘ひしやうかと思つてゐる。
MERSなる文字がパソコン画面に踊りはじめた
頃何と読むのか分らなかつた。いまではニュースで
広く伝はり恐れられてゐる。地球をあつといふ間に
駆けめぐる新しいウイルス。早く収束して欲しいと
願つてゐる。(喜孝)

二〇一五年六月号

発行日 六月七日
発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090 9828 4244
ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房
カット/須賀忠男・松村美智子・テイリ エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年
郵便振替 00130655526 (あを発行所)
乱丁・落丁お取替えます。